

五、兒童の遊戯の結果

兒童の遊戯の價值は兒童の身心全體の發達を助ける點であります。而して兒童の身心全體の完全なる發達は兒童をして善き實生活を遂げ得せしめる所以であります。即ち、此の意味に於いて、兒童の遊戯は實生活の準備になると云はるゝのであります。併し之れはどこまでも結果であつて目的ではありません。遊戯そのものが必ず此の目的即ち實生活の準備の爲めに存するものだと云ふことは同じことであります、言ひ現はし方の誤まりであります。此の區別を明かにしないと即ちグロークがバウルドギンから餘りに實際説に過ぐると云ふ批評を受けたと同じ誤謬に陥るのであります。

以上各項簡単に申述べた他に、兒童の遊戯として尚觸れなければならぬ細かい點が多くあります。併し最初に申しました如く、此のお話の目的は兒童の遊戯に關する問題中の主要のものだけを致しました。唯多くの問題や從來の諸説の中から

之れだけの圖式に纏める爲めの選擇に就ては多少の考究を費した積りであります。終りに臨んで澤山の御是正を願つて置きます。(終)

向上的修養(一)

中島徳藏氏談

▲我が強い婦人は今日は時勢が非常に進歩して、我々の思想の上に大變な變化を來たし、新舊の衝突が總ての上に著しく現はれて居ります、此時に當り我々の心得の一つにもしやうと思ひ、向上的修養と云ふ題に就てお話をすると、今日の婦人は服装でも髪容でも語遣ひでも或は行ひの仕方でも、強い我が判明と現はれて居ります、それに反して昔の婦人は我と云ふことは殆ど知らずに通して來たのであります、それ故に今日の婦人は何も彼も自分から割り出して、種々の事を行つて居ります、例へば衣服の色、模様などにしても、昔の人は極

く澁い色、蚊の飛んで居るやうな模様を好み、今のは昔の人の考へには、我がない、故に世間から或意味於ては、政府から百姓町人は斯様な着物士分は斯う殿上人は斯うと衣服の制を定められ、それをぐずく言ふならば、首を切ると云ふ傾きであったから、自然傍らの者も「其處華美な色は可けませぬ、何でも譯の分らないやうな鼠見たやうな、ポンヤリした色が好い」と云ふと、昔のお嬢さんは然うは參りませぬ「是れは好い色でござります」と云つても「でも私好みないわ」と仰る、萬事其調子で田舎のボット出が元祿模様などの衣類を着て喜んで居る、其點に於ては又殆ど自覺が無い、自分の姿は何うであるか、顔の色艶は何うであるか、自分には何う云ふ色の配合が宜いか、其麼ことは考へを及ぼさず「三越が宜」と云つたから私も宜い」と云ふことになつて、甚だ簡単である、併しそれは又我無我の關係のみで

もないのであるからこれは別として一體に無我と云ふことは、舊幕時代の流行、今日の大勢として世界の風潮から考へて見ても、歐羅巴亞米利加では日本より先に我的色が現はれて來た、故に彼方では益々自分と云ふことを好み、自分と云ふ色合がそこに現はれるやうになつて來た、日本でも漸々然うなりつゝある又然うなつても、悪いことではないのであります、何の爲めに人間が此世の中に出て來たかと云へば、自分以外の人の爲に奴隸になりに來たのではない、矢張り自分は自分の主人である、それ故自分の爲たいことをして、悪いこと云ふ道理はない筈であります、自分の似合ふと云ふのが、明治に於ける我的の有様であります。
▲舊幕時代の婦人 一歩退いて舊幕時代の婦人を見る、全然違ふ「私は之を好みます」と云つたら、社會國家からは、好んではならぬと云ふ、私は之が好きでござりますと云ふと、それでは好いとはなりませぬと云ふそこで「御上が爾う被仰る

ならば私も好みますまい」と云ふそれをば若しも「それでも私はそれを好みます」と云ふものがあつたら、それは犯則者で、之を一言すれば、則ち無我がの人である、我と云ふものを徹頭徹尾退治して仕舞ひ、何物に就ても我と云ふ要求を退けると云ふのか、舊幕時代の大體の精神でありました。

▲無我と其理想抑々人間が、爲たい、食たい、見たい、聞きたい、眠たい、着たい、威張たいたい云ふのは、一言すれば慾である、其色々の慾を悪いとした、慾の悪いと云ふ根本原理を申すと、人間の一切に就て惡事の原を探れば慾である、故に慾と云ふものを退治しなければならぬ、即ち無我主義、言ひ換えれば無慾主義、モツと簡単に哲學上語で申せば、無、有と云ふのが抑も悪く、元々人間が此世に生れて來たのが抑も罪悪、生れなかつたならば、なほ結構な譯である、と斯う云ふ風な腦で考へる、さうして此考へが色々の事の上に現はれる、詩歌文章、さては政治等皆此無主義が徳川時代には貴ばれた、此無主義を色に譬へたならば、黒或は鼠の如きものであります、芭蕉

の句に「枯枝に鳥の止りけり秋の暮」、貴女方が之を聞きになつて面白味を發見なさるか何うか、秋風肅殺の氣が、木の葉を拂ひ落し、草も枯れて、勿論紅い花も無い、そこに黒の色の鳥が一羽、色の上から言つてはコントラストも何にもないが、餘韻のある處、奥行のある處に、味のある俳句であると云つて繪にも描かれ人口にも膾炙して居るが、其廢面白味が何處にあるかと云ふに一切の人間の情慾は是れ即ち迷ひである、其迷ひを去つた處に眞の悟がある、其悟が人をして無慾、無無我たらしむるので、之を禪宗の語で申すと本來の眞面目は、其處の無にあると云ふので徳川時代の人は出來ないまでも、之を理想として居たのであります。

▲兩女の實例之を道徳の方で一言すれば克己、成らぬ勘忍をすると云ふ主義、それが甚だ大切のこと、なつて居つて人間らしい人間は皆其理想の下に修養を積んだのであります、其一例を申すと茨城縣の或村に百姓伊平太と云ふものがありまし、伊平太は今日の生計にも困る貧乏である上に

子供が二人あり其上に濕と云ふ腫物が全身に出来て脚も腰も立たない、膿は出で臭氣は鼻を衝いて殆ど堪へられぬ有様であるけれども妻リエは之を厭ふ氣色もなく八ツに三ツの幼兒を抱へ一家の生計を立てながら其傍ら夫の看病に心を盡して居りました伊平太は妻の貞操に感ずると同時に、薄命なるその行末を案じまして或時妻に向つて申すやう永い間親切なる看護は辭に盡せず難有く思つて居るが此病氣でモウ死も癒らぬと思ふお前はまだ年も若し縹緲も美しいことであるから今の中に良縁を求めて他に縁付いて呉れと申しました、其時リエが我本位から考へたならば早速實家に歸つたで有らうが己れの慾に克つと云ふを理想として居りますリエは泣いて自分の力の有らん限りを盡し夫婦諸共斃れて後已むの決心であると申して其後とても能く夫に盡して居りましたが磐城平の温泉は濕に効顯が著しいと聞きまして村人の恵みに依つて造り與へられた草の車に載せ二人の幼兒を抱き負ひ肌の裂けるやうな寒い日に薄着をして泣く泣く二十日間を道中に費し漸く目的の地に至り療養

を加へたので左しもの悪病も残りなく平癒することが出来ました其後リエの貞節は水戸藩の表彰する所となり現に今日までも其記録が残つて居りますそれが即ち徳川時代の婦人の理想、己れを無きものにして人に盡すので、畫に描きました芭蕉の句を道徳の話に移して申すと此無我主義俗に申す様の下の力持ち、人の爲めに貪身犠牲となることを敢て辭せぬのであります故に又斯様な例もあります武州の本庄と云ふ家があつて上州伊勢崎藩の某氏と結婚した然るに間もなく夫は死し後を嗣ぐべき子供もないので、親戚一同協議の上再婚を勧めたけれども某は之を承引かない強ひて言はれて最後に「宜しうございます、夫では三年忌が済みましたならば御言葉に従ひませう」と言つて承諾の意を示し、いよいよ三年忌の近ぎたる或夜身化粧を施し、衣服を正し夫の位牌に謹んで禮拜をなし咽喉を突いて死んで了つた、所謂貞女兩夫に見えずとの心情を實行した、これなども貞女烈婦の鑑として徳川時代には大に褒められたものであります。

献身克己の缺點
淨瑠璃などに唄はれて居る理想は即ち前申したやう事ですそこで私は之を聞くと涙が零れる、我々の腹には確かにそれを扱へる、「成程感心なものである」と思へばこそ涙もこぼれ、腹にも徹へるのであります、其理非云ふ考へを無くすることに因て何も彼も成立して居つたと云ふことが出来る、之を今日の時代思想から考へるとこんな馬鹿なことはない、又自分を悉く無にすると云ふ事は人間に向つて無理な要求であつて、其通り遣るのが必ず可いとは云へないと思ふ併し又此我を無暗に振り廻はされては甚だ困る、然るに今日立派な教育ある婦人が我がの強過ぎる爲め、一身の不幸を招き、一家の不幸を生ずる例がたくさんある、これは何う云ふ譯であるか、畢竟徳川時代に於ての長所、所謂献身犠牲と云ふことを味ふことが足りない爲めであらうと思ふひ換へれば、理屈は達者になつたが、實行が伴はぬ、献身克己と云ふ、何時の世に在つても人間社

會に甚大切な精神が足らぬ爲めであらう、勿論女性に向つてのみ献身克己を強ふるは不公平な理屈で、男子と雖も、献身克己は必要である。複雑極まる世の中に立つた以上は、男女を問はず人生は總て献身克己の念が深くなければならぬと思ひます。上古は我的時代、中古は無我的時代、現代は我と無我とが巧みに調和さるべき時代で、此調和を拙くすると大へんな事になる、お互に身の破滅、社會國家の破滅になります。

▲古人の賜物私は若い方々に向つて切に御注意申したいのは、前に云ふ徳川時代に於ける理想は、全體の眞理ではなけれど、併し我々の修養として其一部分を取ることは、極めて大切な箇條であると思ふ。即ち今の方々の缺點とする處は、我的強いと云ふことであります、何う考へても人間の世の中は、献身克己でなければならぬ、我を何處までも通さうとすると、一身も亡び一國も亡びる、今日までに西洋各國の亡びたのは、何の爲めか、龜末な我を主張する國民があつたからであります、人生とも其通り、我慾を強くしては、切辛

い世の中を渡つて往くことは出来るものでない、そこで克つと云ふ修養は、我々の意志を強くし忍耐力を強くすることに於て、最も大切になつて来ます、献身克己と云ふと、何か大變に難かしいやうに聞えるか、一枚の着物、一粒の米、一片の麺も皆是れ古人が非常な献身克己の賜物であります、婦人方が今日コンマ以上になるまでには、幾多の古人が献身犠牲の徳に因るのであります。

▲昔の今の我慾は、必ず無我を背景にした我でなければならぬ、社會國家の爲めになるならば、明治時代の我慾は、必ず我慾は龜末だが何處までも献身克己をする、その爲に一身の毀譽は顧みないと云ふのではなければならない、我があつても宜いと云ふのは即ちそれである、故に私は思ふに百姓伊平太の妻に於けるやうな場合には、明治の婦人と雖も我是無いものとし、粉骨碎身して盡さなければならぬ、併し又再婚を迫られたが爲めに、咽喉を突いて死んで了うと云ふ諸井氏の行ひの如きは、明治式道德の上から考へて甚だ取るに足らぬと思ふ、斯ふ云ふ場合には先づ、自分

の立脚地から死は可なりや否なりやを判断してみなければならぬ、又その判断の出来得るだけに明治の教育は進歩して居る筈であります、即ち今の人と昔の人との違ひは意識的に効があつて害のない様に、献身克己をするのと、何でも彼でも献身克己をしさへすれば宜いと考へるのとの違ひであります。

▲献身克己の修業 未だ結婚もなさらぬ若い婦人方は、或事に當つてそれが大變善いことならば、辛からうが服従をする又場合に因て無理だと思つたら無理だから無理を實行しやうと云ふだけの忍耐がなければならぬ、例之ば父母が斯う言つた、友人が斯う云ふ無理なことを言ふと云ふやうなことがあつたならば、無理と承知しながらも負けて置くのが大變に結構です、確乎した人間になるには、苦勞を澤山にしなければならぬ、あ的人はやさしい」と云つて昔の世の中に裏めた人は、一言すれば愚圖、右向けハイ、左向けハイと我意思の判斷もなく抵抗する力もなく、只ハイ／＼する、そんな人間は明治の今日には要らない、明治の婦

人は、夫が家長として命令をした場合には、生命に係るほどの一大事、國家に關する程の大事件ならば格別、さもなければ腹の中では、是れは家長の命令だから遵奉するやうなものゝ、少し間違つて居るやうである、併しながら、今まで大事でもないから服従する方が宜からうと云ふ位の意思の働きがなければなりませぬ、可笑いことがあつても、今は笑ふべきか笑ふ可からざるかを考へて、笑ふべき場合であつたら少々位苦痛があつても忍耐して笑ふ、自分に悲しいことがあるからと云つて場所柄をも辨へず涙を禁め得ぬやうな、薄弱の意思ではこれから先の世の中に立つて何が出来ますか「餓じ」思ひをするのは、苦いから私は餓じい思をして見やう「私は汚ない着物を着るのは嫌ひだから汚ない着物を着て見やう「私は人に負るのが嫌ひだから負けて置かう」此意氣が甚だ大切にな修養となるので、表面上は負けたやうに見えても腹の中の意力が漸次に強くなつて往く、意思の強い徹へのある人間にになりさへすれば此世の中のことは什麼事でも出来ます、二十世紀の世の中

に立ち、西洋諸國と肩を並べ、或はそれを凌駕して進んで往かうと云ふには、只いまばかり強く押通さうとするのは、謬見である、私は此意味に於て、徳川時代の理想も取つて修養の資とする價値が充分にあるものと信じ世の人々に警告をする次第であります。

(完)

育児叢話(承前)

光藤夫人

○公平なる心の大切なる事(賞罰につきて)

今更こゝに申すまでもない事で、誰れでも其位の心掛けのない人は御座いますまいが、しかし三四五六と多くの子供を持ちますと、色々の情實や何かにかられて、つい一方に偏することがありまして、公平の心を缺ぐ事があり易いもので御座います。格別婦人の感情的なる此の弊に陥り易いかと思はれます。同じ我がお腹を痛めました子でも、あの子は可愛らしいから余計に可愛とか、あれは弱い